

# 博物館におけるクラウドファンディングの活用について

平塚市博物館 藤井 大地・澤村 泰彦

## はじめに

平塚市博物館では、平成30年度事業として、15年ぶりに大接近となる火星をテーマに7月～8月に特別展「火星～赤い惑星のひみつ」を開催し、関連事業として望遠鏡で火星を観察する「星を見る会」を実施した。実施にあたり望遠鏡の不足が予測され、市民向けの観望会に適した、コンパクトで操作性に優れ、かつ大口径高性能の望遠鏡を購入する必要に迫られた。そこで市財政課と協議して、クラウドファンディングを実施し、財源とした。

実施したのは、ガバメントクラウドファンディング（以下GCFと略す）と呼ばれるもので、出資者の目的は投資でなく寄附であり、ふるさと納税制度の税控除を受けることができる。ふるさと納税は昨今、過度な返礼品が話題となっているが、当館では返礼品の予算措置はせず、GCF本来の趣旨である事業の魅力に訴えて目標を達成した。

全国の博物館事業には魅力的なものが多く存在し、また公益性も高い。GCFは今後財源を得る一手法として各地で検討される可能性がある。そこで以下にこの事業について報告したい。

## 1. 実施の経緯

GCFの実施は、まず、厳しい市財政の状況下で、さまざまな財源確保の手段を研究していた財政課から提案があった。すでに予算査定結果の告知段階にあり、復活要求のタイミングで、実施の決断は博物館に委ねられた。何としても望遠鏡を購入し大接近する本物の火星を市民に見せたいと願う博物館では、平塚市でどの部局も実施したことがない未知の手法という不安要素も、

- ・ 初の試みという話題性は、事業の実施においてもプラスになる
  - ・ 財政課の支援が約束されている
- 有利な要素ととらえた。さらに、
- ・ 博物館の企画がどの程度社会の中で支持されているのか知ることができる
- 利点があると考えた。

もちろん3つ目の動機は、自治体組織の中ではリスクの大きな両刃の剣といえる。リサーチ結果

が、その事業を不要とする結論の根拠になってしまいう傾向も強いからである。しかし「初実施」という条件が、このリスクも緩和すると考えられた。比較的风险が小さい条件下で、専用の予算も設定せずにリサーチができるわけである。

以上から「今、この機会にこそやってみよう」と結論した。そもそも、機会を逸せば、市民に十分なサービスを提供できず、火星はまた遠ざかってしまう。

最後の懸念は「誰がその事務を担当するか」ということだった。最終的に藤井学芸員に白羽の矢が立ったわけだが、すでに次年度事業計画の大枠が決まっている中、業務量を上乗せする仕事になり、結果、過重負担となった反省が残った。

## 2. 予算（案）の作成

実施の意思を財政課に伝えた後、協議して全体の方針を申し合わせ、望遠鏡購入の予算要求に、急遽、GCFを実施するための項目を組み込んでもらった。

- ・ 歳入予算に指定寄附金を追加する。
- ・ 望遠鏡購入（備品購入費）の歳出予算は博物館の要求どおりとし、ただし寄附収入を購入の特定財源に加え一般財源を削る。
- ・ 寄附の目標金額は購入予算の半分にあたる100万円とする。
- ・ 寄附額が不足した場合も一般財源で補い、事業は予定どおり実施する。
- ・ 歳出予算に、Web上でGCFプロジェクトを実施する事務委託料を加える。
- ・ 歳出予算に、クレジット決済のための事務手数料を追加する。

寄附事業は4月早々にスタートして特別展前の6月まで行なうものとし、予算はすべて30年度当初予算とした。

市財政課では必要な予算の構成や金額の算出を研究済みであり、その指導があったので、博物館で調査検討をする必要はほとんどなかった。また、GCFプロジェクトとして立ち上げる際の参考資料の提供も受けた。委託等の金額は市がふるさと納税の実施を委託している業者の料金設定

（寄附額の10％）を用いた。

この中でポイントは、寄附が目標に達しなかった場合どうするのか、および、費用の半分という寄附目標額の設定である。現在の財政・社会状況の事情から事業に一定の寄附を募り支援を仰ぐものの、市民に生涯学習機会を提供することは自治体の使命と考え責任を持って遂行する、という平塚市の自覚や姿勢を、寄附公募にあたってきちんと示そうとしたのである。

また、こうした趣旨との整合性から、返礼品等の購入や広告宣伝料についても、特別な予算は設けなかった。また、寄附受付は目標額を達成次第終了することにした。

こうして、制度本来の趣旨に沿い、事業の魅力を訴え寄附を募るGCFプロジェクト実施の方針が、予算案とともに出来上がった。この間、市財政課とは質の高い意見交換ができ、それぞれの立場に対する相互理解を深めた。このようにどちらかの事情に偏らず、協議対話のプロセスを踏んで実施の枠組を決めて行くことが、プロジェクトの完成度を高める上で必須と考える。

### 3. Webの作成

本GCFプロジェクトは、株式会社トラストバンクが運営する、ふるさと納税向けのWebサイト「ふるさとチョイス」を利用した。申し込みはWebからのみとし、寄附者は申込完了後にクレジットカードによる決済を行う。

プロジェクトサイトは「七夕のまち平塚で、子どもたちにリアルな火星を見せたい」をスローガンに掲げ、より多くの方にご寄附いただけるように目的や活用方法を次のように記載した。

- ・当館は、これまで市民と学芸員が一緒になって地域の資料を収集、保存し、様々な教育普及活動を展開している。
- ・中でも「星を見る会」は星に興味を持つきっかけとして、天文分野で重点を置く事業の一つである。
- ・今年の夏休みは15年ぶりに地球と火星が大接近する。しかし、望遠鏡が不足しているため、新しい望遠鏡を購入したい。
- ・新しい望遠鏡で子どもたちにリアルな火星の姿を見ていただき、探究心や好奇心を育む。



図1 当プロジェクトのWEBサイトのトップ画面



図2 火星が飛び出してくる特別投影の招待状

### 4. 返礼品の選定

総務省の通達により、ふるさと納税は市内在住の寄附者に返礼品を提供することが禁止されている。従って返礼品による誘引は避けた。設定内容は次のとおりである。

＜市内・市外共通のお礼＞

- ・ファーストライト（望遠鏡に初めて天体の光を導入するお披露目会）への招待
- ・夏期特別展「火星－赤い惑星のひみつ」での寄附者の名前掲出

＜市内のみのお礼（寄附額）＞

- ・火星の大接近を詳しく紹介する「プラネタリウム特別投影」（5,000円以上）

＜市外のみのお礼（寄附額）＞

- ・夏期特別展図録（5,000円以上）
- ・夏期特別展図録と太陽系天体を紹介したガイドブック（10,000円以上）
- ・個別に貸し切りで投影するプラネタリウム「プレミアム投影」（50,000円以上）

また、寄附者の気持ちに真摯に応え、感謝の意を伝えるため、ファーストライトにお誘いする全ての寄附者と、プラネタリウム特別投影を希望する市内の方に、手作りの招待状を用意した。

お礼は、寄附を証明する寄附金受領証明書と、ワンストップ特例申請書と合わせて発送した。

## 5. 実施結果

寄附の公募は平成30年4月3日から6月29日の88日間でいった。だが、6月17日には目標額に到達し、その時点で受付を終了した。平塚市初のGCFプロジェクトということもあり、期間中に地元紙や大手メディアに継続的に取り上げられたことが、早期に達成した要因の一つとなった。

応募は合計93件で、10代から70代まで幅広い方にご寄附いただき、寄附者のうち市内の方が半分以上を占めた。一人当たりの寄附額は5千円から10万円で、平均は1万円ほどであった。

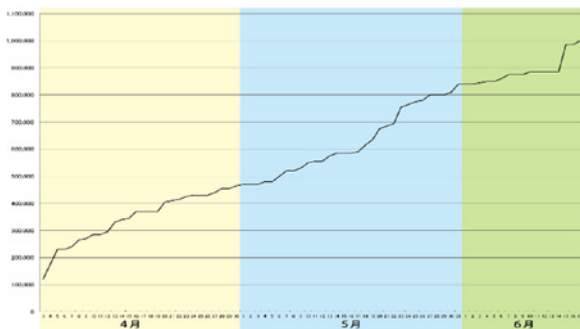


図3 寄附金額の経過 (縦軸:累積の寄附額、横軸:月日)

寄附の理由として「活動に賛同した」を選ぶ方が多かった。返礼品ではなく、活動そのものへの理解があったと伺える。

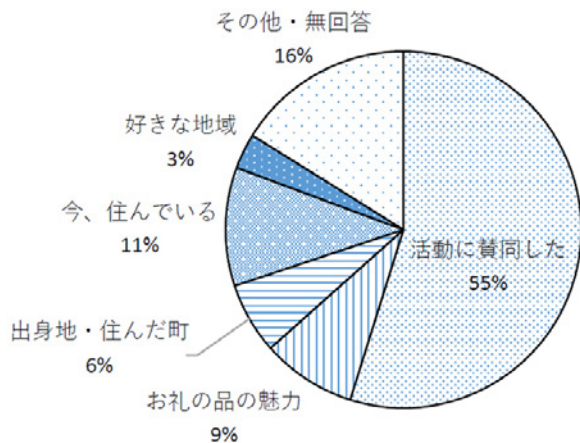


図4 寄附の動機の内訳 (回答数は全部で93件)

また、申込の際に多くの方から応援コメントをいただき、公開が可能な方は随時Webサイトに掲載した。次に、その一部を紹介する。

- 一度平塚博物館の星を見る会に参加しました。富士山は目の前、さそり座も目の前で大きくはっきり見えました。係の方も親切に説明してくださり、感激したのを覚えています。その際、小学生の物知りの少年が望遠鏡を見せてくれて

いました。何かに夢中になる子どもたちをこれからも育てる社会になるといいなと思います。

- 小さい頃からお世話になっている平塚市博物館に、お役に立てて嬉しいです。少しでも星を見る会で多くの方に、星を見てもらいたいです。
- 先日家族でプラネタリウムを訪れて、平塚市博物館学芸員さんのオリジナルの星空解説にとっても感動しました。この素晴らしい環境に新しい望遠鏡を加えて、宇宙の魅力をアピールしてください。そして、もっと多くの子どもたちに星空を通して、科学のすばらしさに触れる機会が増えればいいと思います。

## 6. 望遠鏡を活用した「星を見る会」の実施

寄附や、寄附とともにいただいた応援メッセージには、私たちと同じく「子どもたちに火星を見せたい」という願いが込められていた。GCFの寄附(の本旨)は、節税でも人気投票でもない。自治体の施策に対して共感し、願いを託すものである。

だから事業者の使命は資金集めではなく、あくまでそれを用いて事業を実施し、寄附者の願いに応えることでなければならない。

そこで、購入した望遠鏡を用い実施した事業について、紙幅をいただき述べておきたい。

当館の星を見る会はこれまでも、月に1回ほど館の屋上で実施してきた。光害のため美しい星空は望めないが、日常にある身近な星空に望遠鏡を向けて、気軽に星に親しむことができる。事前の申し込みは必要なく、無料である。

今回の火星大接近では、夏休み中に星を見る会を計4回(7月31日、8月3日、10日、17日)を増やして実施し、火星面の濃淡という難しい対象に対して新しい望遠鏡の観察しやすさを最大限に活用した。中には雲が多い日もあったが、幸いなことに雨が降らなかったため、4回とも実施することができた。

当館には市民が学芸員とともに調査研究や教育普及活動を行う、年間会員制のワーキンググループがある。天文分野には「天体観察会」があり、星を見る会の際、受付や望遠鏡の操作、解説などを担当している。今回の星を見る会では20名近くの会員が参加し、職員も総出で対応した。

特に苦勞したのが、各望遠鏡の配置と来館者の誘導である。火星大接近の際は黄道が低い夏と重

なり、火星は最大でも高度30度程度しか上らない。狭い屋上の中で、屋根や周囲の建物の視野に干渉しない場所を探すのが困難であった。

また今年から始まった駐車場の外部委託化・有料化によって利用時間が制限され、午後10時までに終了する必要があった。多くの方が来館した場合、全員にご覧いただけない不安があった。

そのために、職員や会員とともに何度も綿密にシミュレーションし、限られた場所や時間であっても効率よく望遠鏡を稼働させるように、次のように工夫を施した。

- ・望遠鏡は今回の新しい望遠鏡を含めて合計4台稼働させ、観望する天体を固定した。
- ・望遠鏡の横に色付きのライトをかざし、暗く人だかりの中でも望遠鏡の配置を見やすくした。
- ・列の最後尾に会員を配置し、混乱を避けた。
- ・トランシーバーで状況を共有し、列が長蛇に伸びた場合は、一時的に立ち入りを制限した。

その結果、とくに大きなトラブルはなく、星を見る会は成功裏に終了した。延べ1500名の方にご参加いただき、特に火星最接近の当日である7月31日は晴天に恵まれ、753名の方が火星を観察した。これは1986年のハレー彗星以来、博物館史上歴代2位の参加者数であった。

なお、一般向け火星観察の本番に先立つ7月14日（土）に、寄附者特典に掲げた望遠鏡のファーストライト観望会を実施して、一般向けの会のシミュレーションを兼ね土星や木星を観察した。98人の参加があり、参加者の導線等に課題を抽出して、計画の修正に役立った。



図5 7月31日に星を見る会を実施中の屋上の様子



図6 新望遠鏡で火星をのぞいている様子

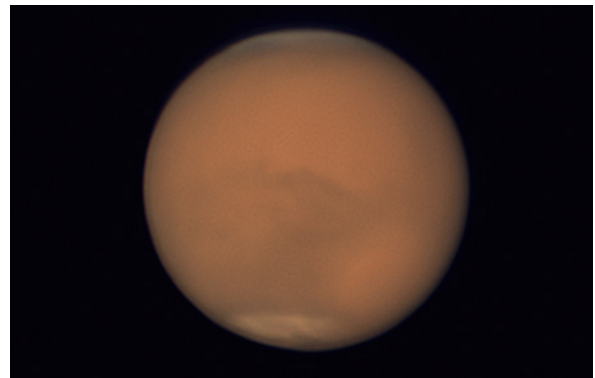


図7 新望遠鏡で7月24日に撮影した火星の様子

☆ 屋上の各望遠鏡の位置（①～④）と観察する天体

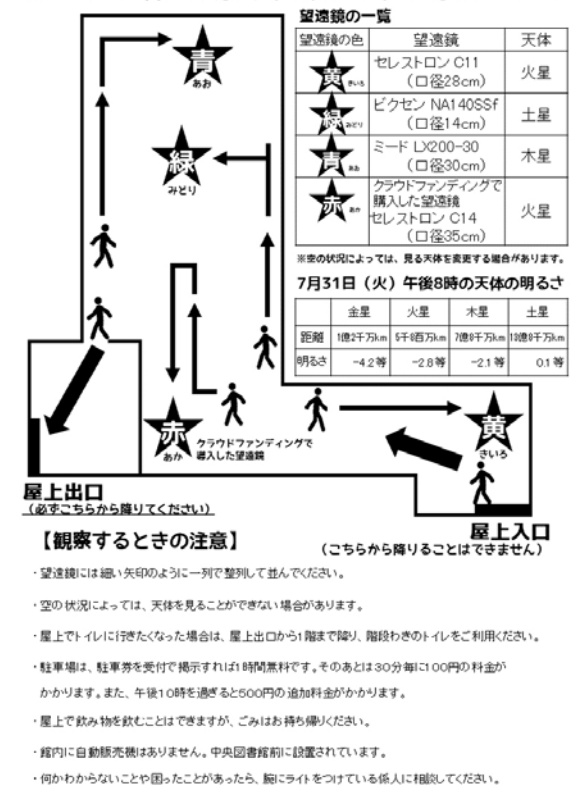


図8 当日配布した望遠鏡の配置図（赤が新望遠鏡）

## 7. 反省点

今回のプロジェクトは、普段の博物館活動に大勢の理解があったからこそ、成立したと考えている。寄附者の中には星を見る会の経験者に加え、ワーキンググループの活動や館の事業を支える協力者も含まれていた。博物館と市民が寄り添い、より学びを豊かにしていこうと重ねてきた努力が、初のGCFプロジェクトを成功に導いた。

また今回は、珍しい試みとしてメディア上で話題にさせていただき、特別な費用をかけずに寄附公募を広く周知できた。広報効果の大きさは、星を見る会の参加人数にも表れた。逆に言えば、「初の試み」でなかったならば、何か別の話題性や広報手段が必要ということである。

さらに財政課と綿密に打ち合わせを重ね、安易に全額を寄附に頼るのではなく、一定の割合で行政の責任も示したことは、好意的に受け止めていただいたように感じる。

ただし、GCFプロジェクトの事務作業は大きな負担となった。経理事務は管理部門で何とか対応したものの、学芸担当でも返礼品の作成、寄附履歴の管理、各種書類の発送等を、夏期特別展やプラネタリウム番組に加え、望遠鏡の調整と星を見る会の準備とも並行して行ったため、多忙を極めた。今回は、寄附の方法を電子決済に限定したが、現金による受入れを併用した場合にはさらに事務の増加が推測される。GCFを実施する場合は、職員数の少ない館では、寄附と本番事業の間に十分な間隔を用意する必要がある。人数に余裕がある館でも、複数人に業務を分散するか、年間の事業計画の中で担当者以外の事務が重ならない配慮が求められよう。

新たに導入した望遠鏡は、今後の「星を見る会」でも活用し、ご協力いただいた皆様の期待にこたえていきたい。